

〔論 文〕

前漢王朝建立時における劉邦集團の戦闘経過について(中)

——劉邦集團内部の政治的派閥の形成を中心に——

陳 力

拙稿「前漢王朝建立時における劉邦集團の戦闘経過について(上)——劉邦集團内部の政治的派閥の形成を中心に——」¹⁾においては、劉邦集團内部の派別形成の分析を目的とする考察の最初の部分として、劉邦が豊を占拠してから漢中進入に至るまでの戦闘経過の整理を試みた。その結論としては、漢中に入るまでの劉邦集團は規模が小さく、劉邦が直接的に将校を指揮することが多い。しかし、劉邦集團内部にすでに呂澤を中心とする呂氏一族のグループが存在していた。また酈商・周勃はよく遠方に派遣され、独自に戦ってほかの部隊より自分の部隊を仕切る自主性があったのではないかなどを指摘した。本稿はその続きとして楚漢戦争中期までの戦闘経過を整理し、劉邦集團の内部の政治的な派別の形成過程を考察していきたい。

秦の二世二年十月(前206)、劉邦軍団は藍田付近で秦嶺山脈の峡谷から出て関中平野を一望できる灊上高地に着いた。『漢書』卷一高帝紀上に、

(漢)元年十月、五星聚於東井、沛公至灊上、秦王子嬰素車白馬、糸頸以組、封皇帝璽・符・節、降於枳道旁。

とあるが、『史記』にはこのような記載がない。「五星聚於東井」という天文現象に関する記載は漢唐史料によくあるが、当時の占星術はこの天象をいい戦果が現れるか、もしくは究極の乱戦の兆しとし、とにかく兵事と関連する天文現象だと認識していた。『史記』卷二七天官書に、

五星分天之中、積于東方、中国利。積于西方、外国用(兵)者利。五星皆從辰星而聚于一舍、其所舍之国可以法致天下。

とある。当時の東方諸国の人々に対しては、秦

はまさに蛮夷の国だと考えられていたので、東方から来た劉邦軍に対して「五星聚於東井」は極めていい天象とされていた。緯書にも「河図曰、帝劉季、日角戴勝、斗匈龍股、長七尺八寸。昌光出軫、五星聚井、期之興、天授図、地出道、予張兵鈐劉季起。」(『後漢書』列伝卷四十上班彪列伝班固上注から引用)のように、この天象を「白蛇を斬る」と同じような漢が天命をうける兆しとされている。

しかし、秦の二世の十月前後このような天文現象が出た可能性はない。この天象が出たのはおそらくその翌年の四月から五月の間とされている。その時、劉邦は漢中から再び関中を占領する準備をしていたのである。このような記載の状況からみれば、劉邦の建国説話の中には、史料の改ざんと付会が少なくないとおもう。本文がテーマとする劉邦集團内の政治的派別に関わる記載も改ざんされたところが多いと言える。例えば、前漢初期に周勃らの大臣は呂氏一族を鎮圧した後、呂氏一族の功績を記録から抹消するために史料の破棄と改ざんが行われ、呂澤の前漢建国における政治的な役割に関する記載がほとんど削除された。さらに前漢王朝の正当性を標榜するため、楚漢戦争に関わる史料も意図的に編纂された²⁾。このような改ざんによって、史料の間に一部の齟齬が起き、劉邦集團内の政治的派別の形成の経緯も曖昧になってしまった。このため、この時期の史料を再整理して史料の前後関係・地域関係・人間関係を確認しながら、劉邦集團内の人的関係を復元していかなければならないとおもう。本文は前述した拙稿の引き続きとして、劉邦集團が三秦奪還・劉邦の彭城の攻略と敗退・韓信の魏・代・

趙の占領について、主に劉邦の部下の戦闘経過を整理して、同じ空間で行動した劉邦集團の主要将校の状況を究明したい。そして将校間のつながりを手掛かりとして初歩的に劉邦集團の人的関係を分析したい。

紙数の関係で劉邦の滎陽周辺での攻防を少し言及するが、その詳細及び韓信の斉の占領・項羽軍との決戦と本論の目的である軍事グループの中からいかに政治的な派別が発生したのかという問題などについて、次稿に譲りたい。

I 漢元年(前206)八月前後の関中における戦闘

1. 戦闘の概要

劉邦軍はいつ漢中から関中に進撃したのかについて、関連記載には混乱がある。『史記』卷八高祖本紀に、

(漢元年)八月、漢王用韓信之計、從故道還、襲雍王章邯。

とあるが、『史記会注考証』卷八高祖本紀に、

八月、『漢記』作五月。梁玉繩曰、漢王定三秦、當依此記。在八月為是。「月表」・「淮陰王(侯)伝」皆云八月。「將相名臣」表亦云秋也。『漢書』襲雍廢丘、於「紀」在五月、於「表」在七月。自相牴牾、而均非事實。蓋四月罷兵就國、未必踰月即出兵襲雍。『漢書』蕭何伝言何諫漢王、願王漢中養其民、以致賢人、収用巴蜀、還定三秦。漢王善之。則是時漢方暫務休息、寧有坐不暖席、便爾東伐乎。況自戲下罷兵至南鄭、自南鄭至雍往返遼遠、非旬日可遍者。當是七月起兵、八月襲雍。

とあるが、曹參・周勃・樊噲らは一時期西・下辯・邽などで戦闘したことがあり、これは陳倉道が封鎖されてから隴西經由で迂回して関中攻略の布石なのか、あるいは陽動作戦・後方確保のための作戦なのかについては不明であるが、これは関中攻略の前奏だと考えて大きな差支えがないとおもう。これらの戦闘は五月に行われた可能性も残されているので、関中攻略の開始時間を「五月」と記録について、まだ完全に否定でき

ないとおもう。史料にたびたび劉邦軍のハイスピードの行軍と戦闘に関する記載があるが、それについて、研究者からその信憑性が弱い意見もあるが³⁾、本文は空間を優先して考えたいので、あえてこれについて深く触れないことにする。

さらに劉邦の関中進出及びその陽動のルートに関してもさまざまな意見がある。一般的には『中国歴代戦争史』⁴⁾に書かれたように、韓信は褒斜道の棧道を修繕する陽動作戦をして故道から陳倉を攻撃して関中に侵入とされているが、辛徳勇氏が指摘したように、陽動行動をした場所は祁山道である可能性もある⁵⁾。『史記』卷十八高祖功臣者年表に

(趙衍)以謁者漢王元年初起漢中、雍軍塞陳、謁上、上計欲還、衍言從他道、道通。

とあり、梁玉繩『史記志疑』引沈進士語に「似「陳」下有「倉」、(中略)説勝程氏」とあり、つまり「陳」を「陳倉」と考えている(『史記会注考証』卷十八に「漢表」「謁(上)」作「渭(上)」、謂雍王章邯之軍陳渭上、塞漢軍出兵口也」とあり、これは程氏『史詮』の説である)。この記載からみれば、秦嶺越えの後半の行軍ルートはより複雑である可能性がある。

表1からみえるように、故道から出た劉邦軍の主力は陳倉(今寶鶏東)で章邯軍と最初の戦いをし、その後、雍(今鳳翔東南)・郿(今武功県付近)の戦闘を経て好時(今乾県付近)に着いたが、そこで章平の粘り強い防衛作戦に遭って戦闘が膠着状態になった。そこで劉邦は一部の軍を残して章平軍と応酬し、曹參・樊噲らは主力を引いて南下して壤(今武功付近)・廢丘(槐里)・柳中(今細柳付近)で章邯軍と戦った。戦況が厳しくなったとき、曹參らの主要将校は章平作戦・章邯作戦の二つの戦場を馳援していた。章平軍が北方に敗退してから、曹參らは咸陽で三秦王の最後の機動軍団の趙賁・内史保を打ち破って咸陽を占拠した。漢元年八月(『史記』卷十六秦楚之際月表)、曹參らの主要将校が廢丘城内の章邯を包囲した。『史記』卷十六秦楚之際月表によれば、劉邦軍の上郡の攻略は漢元年九

Mar. 2019

前漢王朝建立時における劉邦集團の戦闘経過について (中)

月のことで、隴西占領は二ヶ月後の漢二年(前205)十一月、北地圧制は漢二年正月のことであった。つまり、劉邦軍は半年前後の時間で関中及びその周辺地域をほぼ占拠できた。ここでこの時の暦で年の始めを十月とされていたことも強調したい。

2. 将校たちの動向

劉邦集團の将校の動向は表1のとおりである。また、同じ空間で行動した将校の状況は図1に記している。

3. 劉邦集團における四つの方面軍の誕生

劉邦は漢中を占領した(「入漢」)後、史料に記録されている将軍として、劉賈・曹參・酈商・陳武・陳胥・紀成・周勃の名が記載されている。関中を占領した(「定三秦」)後、王吸・薛欧・樊噲が将軍になったようである。図1と表1を合わせてみれば、関中の戦闘の前半は酈商を除く将校はほとんど劉邦と同じ空間で一緒に行動したが、後半戦は基本的に次の四つの方面で展開された。その空間的な関係及び所属関係は図2のように示す。

まず、この時関中中部の渭水周辺はもっとも重要な方面である。劉邦はこの方面にいるようであるが、具体的な戦闘は将軍の曹參が指揮したとおもう。この方面軍に樊噲(白水北・雍・郿・好時・壤郷・郿・槐里・柳中・咸陽・廢丘の順で行軍と戦闘を行った)、将軍の紀成(好時の戦闘に参加した)・灌嬰(廢丘で戦闘し、櫟陽のある塞国の戦区の支援もした)がいる。呂馬童などかなり多くの秦人がこの方面の劉邦軍に参加した。

第二方面は塞王の地で、櫟陽が戦闘の中心である。将軍の劉賈はこの方面の戦闘を直接に指揮したのではないかとおもう。その配下には降伏した秦人の王竟(競)などがおり、ほかに漢二年の時点で秦人の季(李)必・越(後の醴陵侯)なども劉賈に所属していた。

第三の方面は翟王の地であった。呂澤はこの戦区の直接的な指揮官のようであった。

前述したように、呂澤に関する史料は前漢初期改ざん・削除されたのが多い。しかし、『史記』卷十八高祖功臣侯者年表と卷十九惠景間侯年表などに、一部の関連史料が残されている。呂澤に所属している将校は次の数人が記載されている。

丁 復 定三秦, 別降翟王, 属周呂侯。(『史記』卷十八高祖功臣侯者年表)

郭 亭 還定三秦, 属周呂侯。(『漢書』卷十六高惠高后文功臣表)

また、

朱 軫 以騎隊率先降翟王。(『史記』卷十八高祖功臣侯者年表)

朱軫は翟王の地で戦っていたので、彼は呂澤の部下の可能性が高いと推測できる。このほかに、

蠱 逢 属悼武王, 入漢, 定三秦。(『史記』卷十八高祖功臣侯者年表)

郭 蒙 起薛, 属悼武王, (中略), 入漢, 為越將軍, 定三秦。(『史記』卷十八高祖功臣侯者年表)

馮無擇 以悼武王郎中從高祖起豐, 攻雍。(『史記』卷十九惠景間侯年表。この馮無擇はおそらく秦將の馮無択と同姓同名の人物であり、秦將の馮無擇は不明であるが、その子の馮敬はこのとき魏王の豹の将軍であるが、後に漢に降伏した。)

この三人もこの時点で呂澤の部下である可能性は否定できない。この推測が正しければ、史料に記載されている三秦を定めた30人余りの将校のなか、呂澤と繋がりのある将校は6人もおり、当時呂澤が劉邦集團における力量が窺うことができるとおもう。

そして「分遣諸略定隴西・北地・上郡」(『史記』高祖本紀)などの史料からみれば、呂澤軍は大抵漢元年八月翟国の主要都市を攻撃し、漢の二年十一月から周辺地域の掃討を行ったようである。

四つ目の方面は隴西と北地である。酈商はその指揮官で、配下には靳歙などがある。『史記』

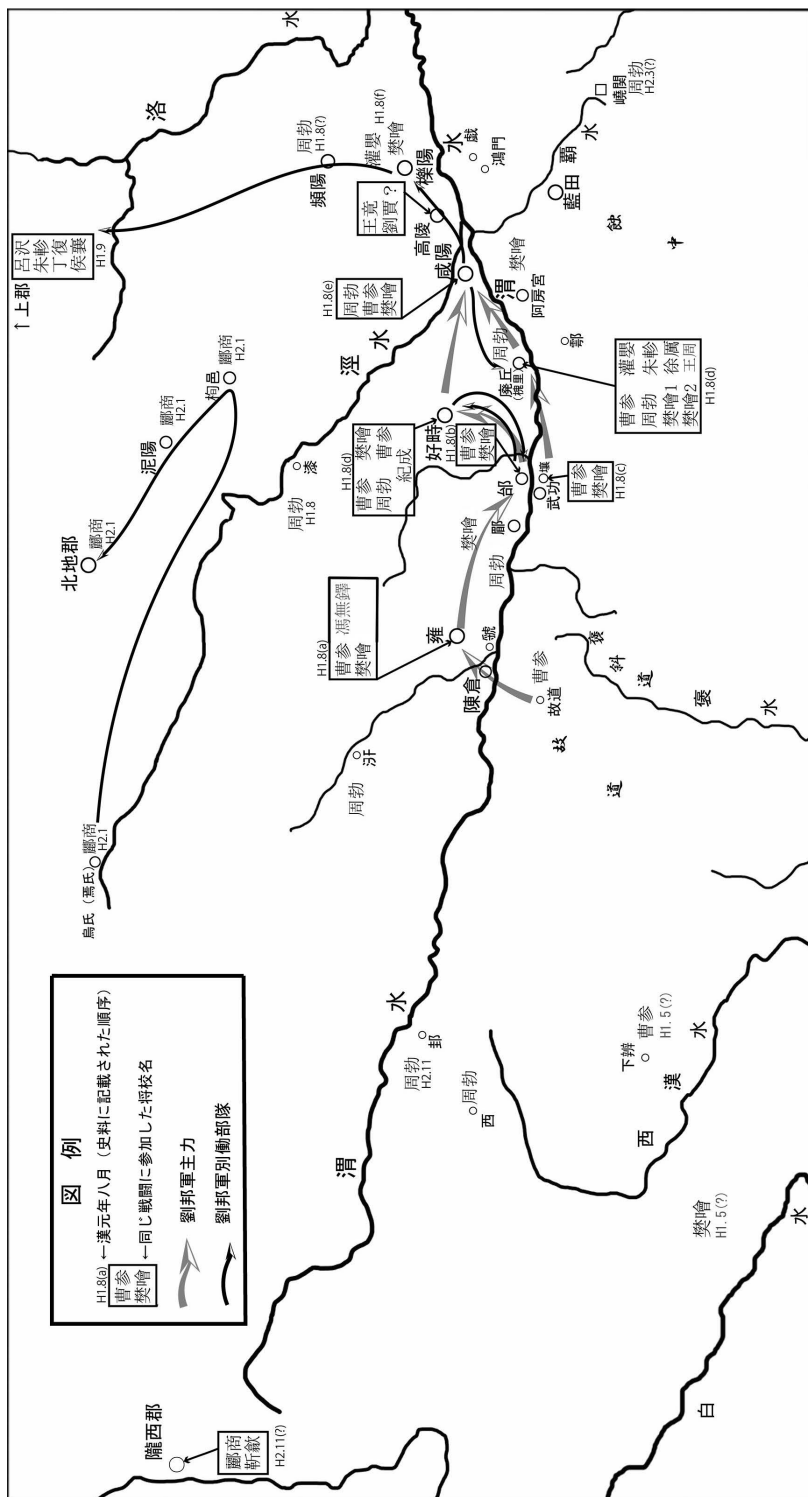


図1 関中の戦闘

表1 関中占領における劉邦軍将校の動静

時間		『史記』秦楚之際月表	人物	爵位	軍階・官職	活躍する場所	出典
年	月						
漢 王 元 年	八 月	「章邯守廢丘，漢圍之」・「(司馬)欣降漢，国除」・「(董)翳降漢，国除」	呂澤	周呂侯	不明	上郡(?)	筆者推測
			韓信		大將軍	不明(劉邦の周辺?)	筆者推測
			劉賈		將軍	賈為將軍，定塞地。	劉賈列伝
			蕭何		丞相	留巴蜀	蕭相国世家
			曹參	建成侯	將軍中尉	攻下辯，故道，雍，郿，好時，壤郷，咸陽，景陵，廢丘。	曹相国世家
			周勃	威武侯	將軍	攻槐里(廢丘)，好時，咸陽，漆，汧，郿，頻陽，困廢丘。	絳侯世家
			樊噲	臨武侯	侍中→侍中騎將→將軍	白水北，雍，郿，好時，壤郷，郿，槐里(廢丘)，柳中，咸陽，廢丘。	樊噲列伝
			夏侯嬰			不明	
			傅寛			不明	
			張蒼			還定三秦	張蒼列伝
			趙衍		謁者	雍軍塞陳，謁上，上計欲還，衍言從他道，道通。	功臣表
			灌嬰		中謁者	從還定三秦，下櫟陽，降塞王。還圍章邯廢丘，未拔。	灌嬰列伝
			丁復		樓煩將	定三秦。別降翟王。属周呂侯。	功臣表
			丁礼		騎將	為騎將，入漢，定三秦。	功臣表
			丁義		騎將	以騎將入漢，定三秦。	功臣表
			蠱逢		二隊將	属悼武王，入漢，定三秦。	功臣表
			朱軫		騎隊率	以騎隊率先降翟王。	功臣表
			郭亭		塞路	還定三秦，属周呂侯。	功臣表
			郭蒙			起薛，属悼武王，(中略)，入漢，為越將軍，定三秦。	功臣表
			紀成		將軍	戰好時	功臣表
	馮無挾			以悼武王郎中從高祖起豊，攻雍。	功臣表		
	周止		郎中	以郎中入漢，為周信侯，定三秦。	功臣表		
	侯周		侯	入漢，定三秦。	功臣表		
	周繆			西入蜀・漢，還定三秦。	功臣表		
	呂馬童		郎中騎將	以郎騎將漢元年從起好時。	功臣表		
	楊武		郎中騎將	以郎中騎將漢元年從起下邳。	功臣表		
	王周		騎司馬	以騎司馬漢元年從起廢丘。	功臣表		
王竟		車司馬	以車司馬漢元年初從起高陵。属劉賈。	功臣表			
	九 月	「(塞国)属漢，為渭南，河上郡」・「(翟国)属漢為上郡」	呂澤	周呂侯	不明	上郡(?)	筆者推測
			閻沢赤		河上守	為河上守，遷為假相，擊項羽。	功臣表
			侯襄		上郡守	(後に)以上郡守擊定西魏地。	功臣表
漢 王 二 年	十 月	王至陝。					
	十 一 月	漢拔我隴西。	酈商	信成君	將軍→隴西都尉	隴西	酈商列伝
			靳歙			從定三秦。別西擊章平軍於隴西，破之，定隴西六縣。	靳歙列伝
正 月	漢拔我北地。	酈商	信成君	將軍→隴西都尉	別定北地。破雍將軍焉氏，周類軍梅邑，蘇駟軍於泥陽。	酈商列伝	

卷九五酈商伝に、

漢王賜商爵信成君，以將軍為隴西都尉。別將定北地・上郡。破雍將軍焉氏，周類軍柤邑，蘇駟軍於泥陽。

とあり、しかし『後漢書』卷五八傅燮伝に

高祖初興，使酈商別定隴右。『前書』，漢王賜酈商爵信成君，以將軍為隴西都尉，別定北地。

とある、酈商の戦闘地域を記載している。又、『史記』卷九八靳歙伝には、

從定三秦。別西擊章平軍於隴西，破之，定隴西六県，所將卒斬車司馬，候各四人，騎長十二人。

とある。これらの記載から、酈商は隴西都尉に任命されたが、彼が直接指揮する戦闘の場所は北地周辺で、騎都尉の靳歙は將軍の酈商の配下に置かれ、隴西の戦闘は主に靳歙によって行われた可能性がある。

また、藤田勝久氏は『項羽と劉邦の時代』で「最初に漢中を定めた灌嬰は、漢王から信武君の爵をえたが、將軍をもって隴西都尉になっている」としているが、この文にある「灌嬰」はお

そらく「酈商」の誤植であるとおもう⁶⁾。

最後に、戦略的機動部隊として、將軍の周勃が率いる部隊があり、南部は嶢関まで、中部は廢丘、北部は隴西と上郡まで、各方面を往来機動して戦っていた。おそらく関中の中部のいくつかの戦闘に参加してから、周勃は関中の中心部に離れ、関中の北部や東部、三秦の西部で掃討作戦を担当した模様で、関中中部の戦闘状態が緊張になるとき、周辺地区から緊急に中部の戦場に召還されたこともある。また、樊噲や灌嬰なども臨時の応援部隊を率い、戦区をまたがって戦闘を行なった。

『史記』卷八高祖本紀と『漢書』卷一上高帝紀に関中奪還戦の全体的な戦闘経過を記録しているが、劉邦の具体的な動きを明示していない。このとき樊噲の官職は「侍中」、「侍中騎將」であり、彼は劉邦の近辺にいると考えられる。樊噲は白水北・雍・郿・好時・壤郷・郿・槐里(廢丘)・柳中・咸陽・廢丘の順で行軍と戦闘を行ったので、劉邦はおそらく樊噲の行軍コースと近い動線で行動したのではないかとおもう。

劉邦のトップクラスの幕僚のなか、蕭何は

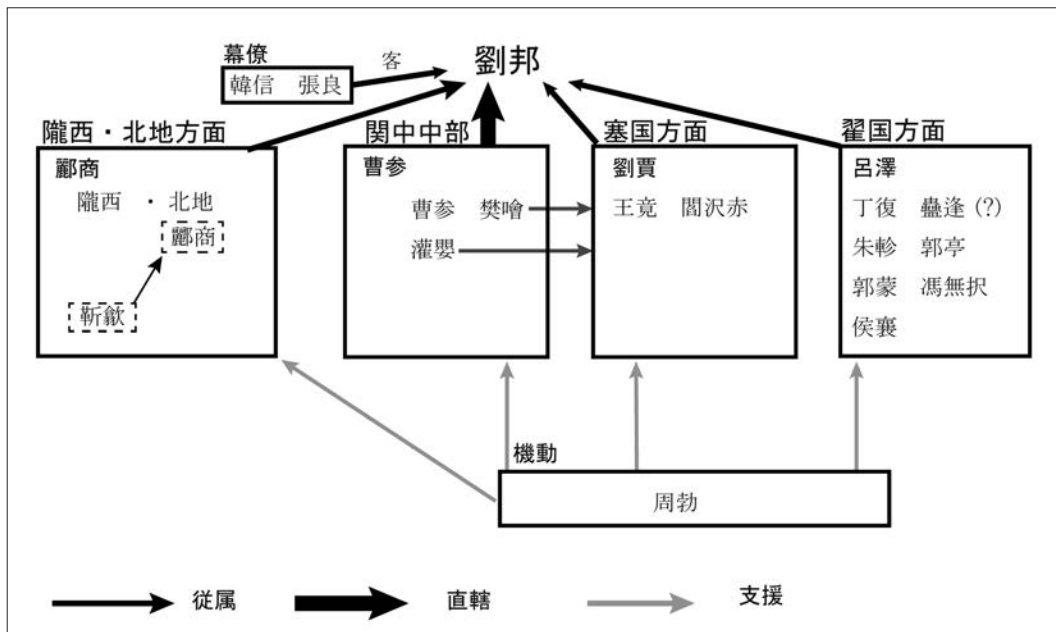


図2 関中戦闘における劉邦軍の空間的分布と所属関係

「留巴蜀填疏論告」(『史記』卷五三蕭相国世家)としている。蜀には林摯(平棘侯執)などの軍事将校が駐屯し、蕭何を補佐していた。ほかに、張良は関中占領の後期に劉邦軍に帰還した。諸侯にあたる韓信(後の韓王の信)も漢中から劉邦と一緒に三秦に入った。廢丘を包囲したとき、張耳も劉邦軍に入った。

Ⅱ 漢二年四月から漢二年後九月までの戦闘

1. 戦闘の概略

漢二年の十月から、劉邦は項羽の彭城を攻撃する前に、障碍になりうる河南王・韓王・魏王を降伏させた。その四月に、劉邦は五つの諸侯の兵を率いて彭城へ進撃した。当時、項羽は斉の地の反乱を鎮圧するため彭城にいなかったので、劉邦軍は迅速に項羽の首都である彭城を占領した。

その後、項羽は斉の地から帰還して彭城付近の劉邦軍を急襲した⁷⁾。劉邦軍は大敗を喫して下邑・碭・虞を經由し、その年の五月に滎陽まで敗退した。灌嬰が指揮した秦人騎兵の防御作戦で滎陽の東や京と索の間で防御線を構築し楚軍の進攻を食い止め、やっと戦線を滎陽周辺に定着させた(この滎陽攻防の詳細について、紙数の関係上次稿で分析したい)。

このとき、劉邦軍敗退の情報が秦の地に入り、また飢饉の兆候もあって関中は不穏になり、劉邦軍に廢丘で包囲された章邯軍は劉邦軍の後方に対する危険な存在になった。そこで劉邦・曹參らは関中にもどり、廢丘を落城させて章邯を殺害し、関中を安定化させた。また関中にいる秦人ではない東方出身の青年(諸侯子)を太子の近衛軍として従軍させ、都である櫟陽に集合させた。これも秦人の造反を防ぐ手段であったとおもう⁸⁾。関中が安定になったその年の八月、劉邦は再び滎陽に行き、それと同時に韓信軍は魏・代・趙を攻撃し、その地を占領した。

魏・代・趙を占領する軍事行動のなか、韓信

の指揮の下に曹參は魏の地の占領を担当し、所属不明な靳歙は黄河西岸の趙の地などを占領した。韓信は曹參とともに魏の地を占拠し、そして張耳とともに代及び趙の北部を占領した。後のことになるが、燕の地は平和的に劉邦集團のものになった。

2. 将校の動向

この時期の将校たちの動きは表2にまとめた。将校たちの空間的關係は図3の通りである。

3. 指揮命令系統の推察

漢二年五月までの劉邦軍の指揮系統は基本的に関中攻略の時と同じだと考えられる。つまり、劉邦軍は呂澤・劉賈・曹參・酈商らの将軍が指揮した幾つかの方面軍で構成されていた。彭城敗退後の滎陽防御線を構築する頃から魏・代・趙攻略の時(漢二年後九月)まで、この指揮系統には徐々に変化が起き、漢二年八月に至ると劉邦軍の指揮系統に大きな変化があった。それは魏を攻める新しい方面軍が作られ、韓信はその司令官になったのである。漢中時代にすでに大將軍になった韓信がここまでの軍事面で果たした役割について、史料に記載された事件は少ない。特に三秦を定める時期には、韓信関連の記載はほとんどないことから、韓信は大將軍に拜命されたが、実際の部隊の指揮よりも劉邦の近辺で幕僚的なことをしていたのではないかと推測する。劉邦が彭城から滎陽まで敗退したとき、以前項羽と繋がりのある造反者が続出したなか、韓信は忠誠心が変わらなかったうえに、項羽軍に対する京・索での反撃作戦の指揮をとってその戦闘が勝利を収めたため、韓信は一層劉邦に信頼され、第一線部隊の指揮が委ねられたのではないかと考えられる。このため、魏を攻略する作戦のなか、曹參(将軍)・灌嬰らが率いる部隊は韓信の配下に置かれた。

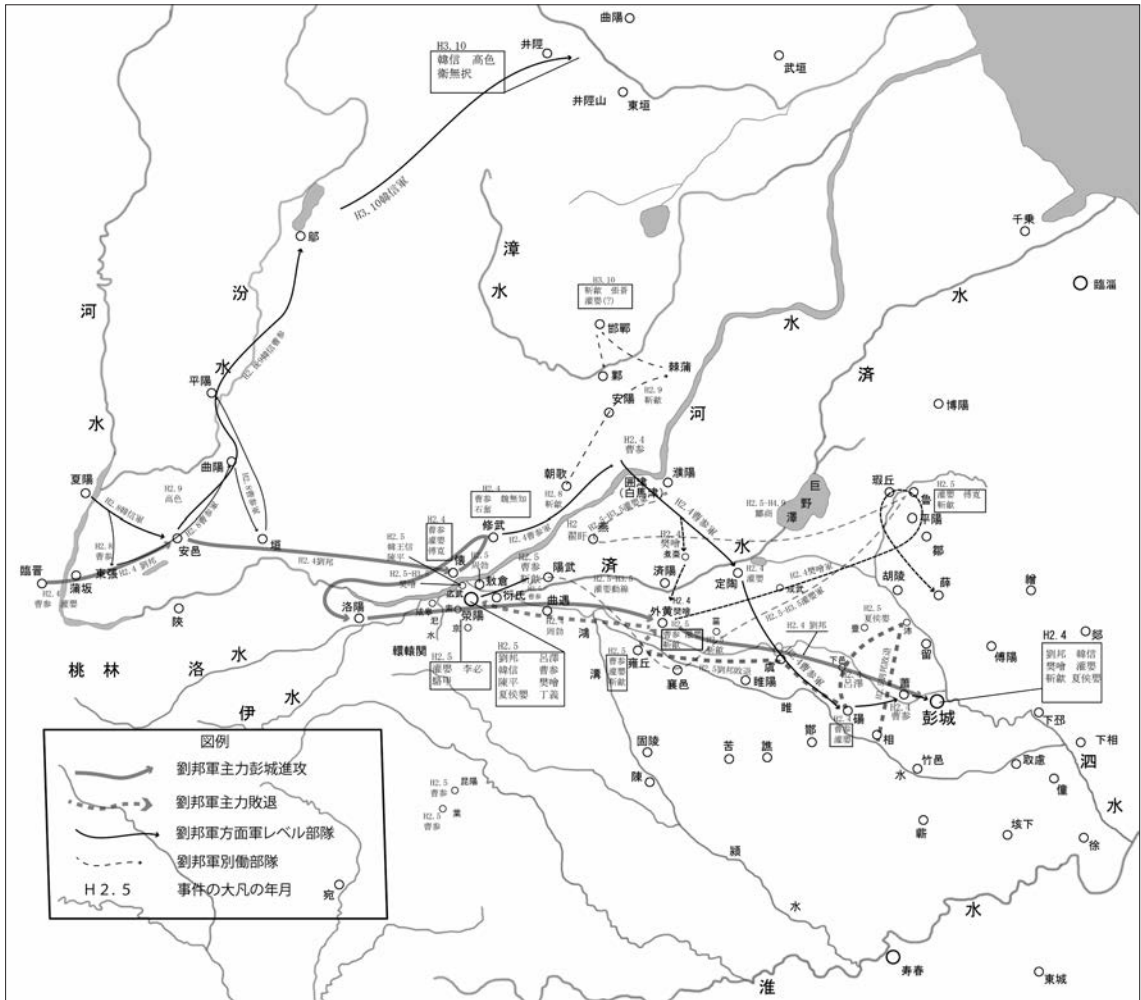


図3 漢二年の戦闘

表2 漢二年三月から後九月諸将校の動向

年	月	漢書紀・史記月表	人物	場所・経過	出典
漢二年	三月	王擊殷	曹參	出臨晉関，至河内，下修武。	曹相国世家
			陳平	遂至修武降漢	陳丞相世家
			灌嬰	從東出臨晉関，擊降殷王，定其地。	樊鄴滕灌列伝
	四月	王伐楚至彭城，壞走。	呂澤	是時呂后兄周呂侯爲漢將兵居下邑，漢王聞往從之，稍稍收其士卒。至滎陽，諸敗軍皆會，蕭何亦發関中老弱未傅悉詣滎陽。	項羽本紀
			韓信	至彭城	韓信伝
			曹參	渡涇津，東擊龍且，項他定陶，破之。東取碭，蕭，彭城。擊項籍軍，漢軍大敗走。	曹相国世家
			周勃	攻曲遇。最。	張陳王周伝
			陳平	至彭城，爲楚所敗。	陳丞相世家
			呂澤	在下邑	高祖本紀
			樊噲	從攻項籍，屠煮棗。擊破王武，程処軍於外黄。攻鄒，魯，瑕丘，薛。	樊鄴滕灌列伝

前漢王朝建立時における劉邦集團の戦闘経過について (中)

Mar. 2019

前漢王朝建立時における劉邦集團の戦闘経過について (中)

漢二年	四月	王伐楚至彭城，壞走。	酈商	以隴西都尉從擊項籍軍	樊鄴滕灌列伝
			夏侯嬰	從擊項籍，至彭城。	樊鄴滕灌列伝
			灌嬰	擊項羽將龍且，魏相項佗軍定陶南，疾戰，破之。	樊鄴滕灌列伝
				復以中謁者從降下碭，以至彭城。項羽擊，大破漢王。漢王遁而西，嬰從還，軍於雍丘。王武・魏公申徒反，從擊破之。攻下黃。	樊鄴滕灌列伝
			靳歙	從東擊楚，至彭城。漢軍敗還，保雍丘，去擊反者王武等。略梁地。	傅斬劓成列伝
				別將擊邢説軍菑南，破之。	傅斬劓成列伝
			傅寬	從擊項籍，待懷，賜爵通德侯。從擊項冠・周蘭・龍且，所將卒斬騎將一人敖下。	傅斬劓成列伝
			翟盱	以漢王二年為燕令	高惠高后文功臣表
			奚意	以魏郎漢王二年從起陽武，擊項籍，屬魏王豹，豹反，徙屬相国彭越。	高祖功臣侯者年表
	繪賀	以連敖擊項籍。漢王敗走，賀擊楚迫騎，以故不得進。漢王顧謂賀祈王。	高祖功臣侯者年表		
	馮無挾	以悼武王郎中，兵初起，從高祖起豐，攻雍丘，擊項籍，力戰，奉衛悼武王出蔡陽，功侯。	惠景間侯者年表		
	五月	①王走蔡陽。②魏豹反。	曹參	還至蔡陽 參以中尉圍取雍丘，王武反於(外)黃，往擊，尽破之，柱天侯反於衍氏，又進破取衍氏，擊羽嬰於昆陽，追至葉，還攻武彊，擊諸侯。	曹相国世家 曹相国世家
			韓信	漢兵敗散而還，信復發兵与漢王会蔡陽，復擊破楚京・索間，以故楚兵不能西。	韓信伝
			呂澤	蔡陽	
			陳平	引師而還，收散兵至蔡陽。以平為亜將，屬韓王信，軍広武。	陳丞相世家
			周勃	還守敖倉	張陳王周伝
			樊噲	項羽敗漢王於彭城，尽復取魯，梁地。噲還至蔡陽。	樊鄴滕灌列伝
				以將軍守広武。一歳。	樊鄴滕灌列伝
			夏侯嬰	致孝惠，魯元於豊。賜食祈陽。	樊鄴滕灌列伝
漢王既至蔡陽，收散兵，復振。				樊鄴滕灌列伝	
灌嬰			漢王遁而西，嬰從還，軍於雍丘，王武，魏公申徒反，從擊破之。攻下外黃，西收軍於蔡陽。	樊鄴滕灌列伝	
	受詔別擊楚軍後，絶其餉道，起陽武至襄邑。擊項羽之將項冠於魯下，擊破柘公王武軍燕西，擊王武別將桓嬰白馬下，破之。	樊鄴滕灌列伝			
灌嬰	灌嬰雖少，然数力戰，乃拜灌嬰為中大夫，令李必，駱甲為左右校尉，將郎中騎兵擊楚騎於蔡陽東，大破之。	樊鄴滕灌列伝			
	出鉅野，与鍾離昧戰，疾闘，受梁相国印，益食邑四千戸。以梁相国將從擊項羽二歳三月。	樊鄴滕灌列伝			
酈商	破楚軍蔡陽東	傅斬劓成列伝			
丁義	破籍軍蔡陽	高祖功臣侯者年表			
朱軫	虜章邯	高祖功臣侯者年表			
季(李)必	攻破廢丘	高惠高后文功臣表			
徐厲	得雍王邯家属(?)	惠景侯者表			
六月	①王入関立太子。復如蔡陽。②関中大飢。③引水灌廢丘，廢丘降，章邯自殺。	曹參	入屯兵関中(曹相国世家は漢三年とする)	曹相国世家	

漢二年	八月	韓信	擊魏	淮陰侯列伝
		曹参	以假左丞相別与韓信東攻魏將軍孫遜大破之。攻安邑，得魏將王襄。擊魏王於曲陽（絳付近），武垣（垣）。	曹相国世家
		灌嬰	漢王以韓信為左丞相，與曹参，灌嬰俱擊魏。	『漢書』高帝紀
		靳歙	別之河内，擊趙將賁軍朝歌。（中略）。從攻安陽以東，至棘蒲。	傅靳蒯成列伝
		高色	以將軍擊魏・太原・井陘，属淮陰侯。	高惠高后文功臣表
	楊喜	以郎中騎漢王二年從起杜，属淮陰。	高祖功臣侯者年表	
	九月	漢將信虜豹。	曹参	生得魏王豹
後九月		曹参	因從韓信擊趙相国夏説軍於鄒東，大破之，斬夏説。	曹相国世家

Ⅲ 「属」という相互関係からみた劉邦集團内部の軍事グループの形成

紙数の関係で、滎陽での攻防及び漢三年以後の劉邦集團が天下をとる戦闘経過について、すでに完成した別稿に譲って別途で公表したいが、ここでまず劉邦集團の「属」という相互関係を検討するとき、漢三年から漢五年の事件にも触れることを先に断っておきたい。

『史記』卷十八高祖功臣侯者年表などの史料には、度々某将校がその上級の指揮官に「属」する記録がある。表3はこの年表の関係史料と一部の本伝史料の纏めである。

ここでまず、劉邦集團内部の「属」という相互関係の成り立ちをみていきたい。『史記』卷十八高祖功臣侯者年表は基本的に時間軸で各功臣の功労を記録し、時には史料の伝写錯誤や佚失があるが、このようなことは異例で多くはない。表3でわかるように、『史記』卷十八高祖功臣侯者年表からみれば、秦末の時の劉邦集團における「属」という相互関係は少なく、おそらく郭蒙が呂澤に「属」したとの一例しかない。覇上に至ったときの記載でも蠡逢が呂澤に「属」する一例だけである。三秦を定めるとき、「属」に関する記録が増え、丁復・郭亭（『漢書』卷十六高惠高后文功臣表）が呂澤に「属」することと、王竟（競）が劉賈に「属」することが記載された。つまり、秦末の時、劉邦集團内のもっとも有力なグループの呂澤グループの長である呂澤は

三秦を定めたときには数多くの将校と「属」という関係を築き上げた。これは呂澤グループの劉邦集團における地位を表しているのではないかとおもう。同時にこの時期には史料に劉賈と「属」の関係を作った将校も現れ、これは劉賈グループの重要性を意味しているのではないかと考えられる。そして呂澤と劉賈はいずれも劉邦の親戚であることも看過できない。関中攻略の時にほぼ劉邦と一緒に行動した曹参などと違って、呂澤と劉賈はそれぞれ独自で塞国方面及び翟国方面の戦闘部隊を統括していた。この二人のこのような立場に注目するべきである。つまり、方面軍レベルの軍隊を統括しないと、部下と「属」という相互関係が発生しないのではないかと窺える。

漢三年（前205年十月から前204年九月まで）になると、「属」に関する記録が急激に増えた。これは主に趙の地の圧制により、韓信は確実に方面軍の長になったことによるのではないかとおもう。

漢四年、韓信が斉を侵攻する前後、曹参・傅寛・灌嬰・高邑（色）らも劉邦の派遣を受けて韓信に「属」した。趙の降伏将校（趙将夕（夜）、漢の三年前後韓信に「属」した）や斉の降伏将校も韓信に「属」し、韓信に「属」する将校の数は大きく膨らんだ。

なお、韓信は陳下に向かったあと、曹参が斉の地を制圧する司令官になって、この時点で、傅寛は曹参に「属」することになった。灌嬰は

表3 『史記』卷十八高祖功臣侯者年表の記載された「属」

人名	出典	時間							説明	
		秦末	覇上に至る	漢中に入る (漢元年)	三秦を定める	漢二年八月以後	漢三年十月以後	漢四年前後		漢五年前後
曹參	功臣表	從起沛	至覇上	將軍		出征魏		出征齊。 右丞相。		
	本伝					以假左丞相別与韓信東攻魏將軍孫遫		參以右丞相 属韓信，攻破齊歷下軍。 從韓信擊龍且軍於上假密。	留平齊未服者	属韓信
呂澤	功臣表	以客從		入漢為侯	還定三秦	將兵先入碭，復發兵佐高祖定天下。				
劉賈	本伝	不知其何属，初起。			還定三秦，劉賈為將軍，定塞地。	從東擊項籍	使劉賈將二万人，騎數百，渡白馬津入楚地，燒其積聚。			
傅寛	功臣表	以舍人從起横陽	至覇上，為騎將。	入漢	定三秦			属淮陰，定齊，為齊丞相。		属韓信
	本伝	以魏五大夫騎將從，為舍人，起横陽。	從至覇上	從入漢中，還為右騎將。	從定三秦	從擊項籍		属淮陰，擊破齊歷下軍。 属相国參	定齊地	属韓信 属曹參
灌嬰	功臣表	以中涓從起碭	至覇上，為昌文君。	入漢	定三秦			以車騎將軍 属淮陰，定齊，淮南及下邑。	殺項籍	属韓信
孔聚	功臣表	以執盾前元年從起碭		以左司馬入漢			為將軍，三以都尉擊項羽，属韓信。(?)			属韓信
陳賀	功臣表	以舍人前元年從起碭		以左司馬入漢			用都尉属韓信，擊項羽有功，為將軍。(?)			属韓信
丁復	功臣表	以趙將從起鄴	至覇上，為樓煩將。	入漢	定三秦別降翟王，属悼武王。			殺龍且彭城，為大司馬，破羽軍葉，拜為將軍		属呂澤
郭蒙	功臣表	(從)起薛。属悼武王，破秦軍杠里，楊熊軍曲遇。		入漢，為越將軍。	定三秦	以都尉堅守敖倉，為將軍，破籍軍，功侯				属呂澤
莊不識	功臣表	以舍人從	至覇上	以騎將入漢		還擊項羽，属丞相甯。				属丞相甯
蠡逢	功臣表	初從起碭	至覇上，為執珪，為二隊將，属悼武王。	入漢	定三秦				以都尉破項羽軍陳下	属呂澤

戴野	功臣表	以舍人從起碭		用隊率入漢		以都尉擊籍		轉擊臨江, 屬將軍賈。	屬劉賈
丁礼	功臣表	以中涓騎從起碭中		入漢	定三秦, 侯。	以都尉擊籍		屬灌嬰, 殺龍且。	屬灌嬰
趙將夕(夜)	功臣表						以趙將漢王三年降, 屬淮陰侯。定趙, 齊, 楚。		屬韓信
王翳	功臣表						以郎中騎漢王三年從起下邳	屬淮陰, 從灌嬰共斬項羽。	屬韓信
楊喜	功臣表					以郎中騎漢王二年從起杜		屬淮陰, 後從灌嬰共斬項羽。	屬韓信
高邑	功臣表	以客從起鬻桑		以上隊將入漢		以將軍定魏太原, 破井陘。	屬淮陰侯, 以鉅度軍擊籍。		屬韓信
季必	功臣表					以都尉漢二年初起櫟陽, 攻廢丘, 破之。因擊項籍		別屬(丞)韓信破齊軍	屬韓信
王竟	功臣表				以車司馬漢王元年初從起高陵, 屬劉賈。				屬劉賈

淮南地区で単独で戦闘するとき、丁礼は灌嬰に「属」することになった。この時期の曹参や灌嬰は広大な土地を占拠し、膨大な部隊を指揮していたので、一方面の長と言っても過言ではないとおもう。「属」という関係はこのように徐々に広がっていた。

では、この「属」と記録される軍隊での人間関係はいったいどのような関係であろうか。まず灌嬰の戦闘経歴からこの「属」の性質を確認したい。

灌嬰部隊は漢五年東城で項羽を自害に追い込んだ部隊である。その時、灌嬰の部下に王翳・楊喜がいるが、この二人は灌嬰といずれも「属」ではなく、「従」という関係であった。しかし、この二人は相当早い時期に灌嬰の部隊に入った可能性が極めて高い。楊喜は漢二年に秦の地の杜で劉邦集團に参加したが、この時灌嬰の食邑はこの杜にある。また、王翳は漢三年下邳で劉邦集團に加入したと記録されているが、漢三年

前後に下邳で長時間に楚軍と戦って最後下邳に占領したのも灌嬰であった。王翳はその時に灌嬰に降伏したとおもう。さらに、季(李)必は漢二年五月前後廢丘で劉邦集團に降伏したのであるが、その後中大夫の灌嬰のもとで校尉として郎中騎兵を実際に仕切っていた。後に劉邦の命令で灌嬰と郎中騎兵は韓信の配下に置かれ、齊の戦闘に参加し、漢四年十一月の龍且を殺害する戦闘まで灌嬰の配下におとされられる。

しかし、これらの灌嬰の長年の部下は灌嬰に「属」するのではなく、韓信に「属」しているのである。これからみれば、「属」は相対的に固定化された上司と部下の相互関係を示す言葉ではないとおもう。

「属」という人的相互関係は擬制親族関係の側面があると同時に、「主」と「臣」との相互関係の側面もあるとおもう。直接的な史料ではないが、『史記』卷九二淮陰侯列伝に、

(韓) 信由此日夜怨望, 居常鞅鞅, 羞与絳・

Mar. 2019

前漢王朝建立時における劉邦集團の戦闘経過について(中)

灌等列。信嘗過樊將軍噲，噲跪拜送迎，言称臣。

とあり、樊噲は韓信に「属」していないとおもうが、その身分が周勃や灌嬰と同じ(侯第として、周勃は第四位、樊噲は第五位、灌嬰は第九位)であり、この時灌嬰らに因んで「臣」と自称したと考えられる。韓信に「属」する灌嬰も韓信の前でおそらく「臣」と自称していたであろう。

秦の時、「属籍」が存在していた。前漢前期以後になると、これは単なる皇族の族譜と考えられているが、実際その状況はより複雑である。例えば、『史記』卷一百七魏其武安侯列伝に、

挙適諸竇宗室母節行者，除其属籍。

とあり、つまり竇氏一族にも属籍があることを示している。さらに同じ魏其武安列伝『索隠』に、

『索隠』案，謂宗室之中及諸竇之宗室也。又姚氏案，「酷吏伝」，「周陽由，其父趙兼，以淮南王舅侯周陽，故因改氏。由以宗室任為郎」。則似是與國有親戚属籍者，亦得呼為宗室也。

とあり、直接的な血縁関係がなくてもその宗室の属籍に入れることができる。つまりこの時、属籍には非皇室的な側面があると同時に、血縁関係のない人も属籍に登録できる、つまり血の繋いでいない擬制家族的関係を持つ人も有力者の属籍に登録できるということになる。秦において「軍功」を持っていない人は属籍に登録できないことからみれば、この属籍は最初には一定な軍事的な性格をもつと考えられる。劉邦集團は「属」の関係をつくる時、「属籍」のような書面の登録があってもおかしくないとおもう。

「属」という相互関係には「主」と「臣」の意味合いがあるので、このような関係は簡単に解消できないと考える。表3の史料でわかるように、同時に二人の上司に「属」する記録はない。そもそも漢代において「両属」は決していいことではない(『漢書』卷九六上西域伝上鄯善国条を参照)。「高祖功臣侯者年表」に陳嬰はまず項梁に「属」し、項羽が自害したあと劉邦に降伏して漢に「属」したこと、また魏王の豹に属した奚意は魏王の豹の造反で彭越に転属したこと

を記録しているが、これは異例のことだとおもう。韓信が項羽に「属」し、漢には「入る」と記載されているが、「漢に属する」と記載しないため、ずっと客人の身分ではないかとおもう(もともと魏豹に「属」した張説も同じ状況ではないかとおもう)。こういへども、劉邦集團に「属」の関係を解消した例及び転属する例がある。現存史料ではこのような事例はいずれも韓信方面軍で発生したことである。斉の占領作戦の際に韓信に「属」した曹參は、龍且を討つとき(漢四年十一月)韓信との関係は「従」に変化した。おそらく以前韓信に「属」していた傅寛もこの時も転じて曹參に「属」した。これは劉邦の韓信グループの切り崩しの方策ではないかとおもう、一種の特例ではないかとおもう。

実際をみれば、劉邦集團の内部の「属」という関係は、呂澤グループのような長年の所属関係でできたものもあるが、曹參・灌嬰などのような、劉邦集團の戦略的な必要でおそらく劉邦の命令により韓信に「(転)属」した将校もいる。このような「属」という連帯関係は呂澤集團のこのような関係と比べるとかなり弱いと考える。これはなぜ劉邦は簡単に修武で韓信の軍権を奪うことができ、後に韓信の王位を剥奪できる理由の一つではないかとおもう。つまり、韓信が統括した将校と部隊が多いが、これらの将校の多くは韓信に「属」しても、それは転属の部隊で韓信に忠誠心をもっていないと考えられる。

なお、次稿において、筆者は漢三年以後の劉邦集團の戦闘経過を整理しながら、韓信方面軍の人的な繋がり及び曹參をはじめとする政治派別が存在するかについて検討し、前漢成立後の論功行賞のなかの蕭何派と曹參派との政治的争いの背景と意味を考察していきたい。

史料の略称

「功臣表」:『史記』卷十八高祖功臣侯者年表。

「曹相国世家」:『史記』卷五四曹相国世家。

「絳侯世家」:『史記』卷五七絳侯世家。

「淮陰侯列伝」:『史記』卷九二淮陰侯列伝。

「樊鄴滕灌列伝」:『史記』卷九五樊鄴滕灌列伝。
「傅靳蒯成列伝」:『史記』卷九八傅靳蒯成列伝。
「樊噲列伝」:『史記』卷九五樊鄴滕灌列伝樊噲。
「灌嬰列伝」:『史記』卷九五樊鄴滕灌列伝灌嬰。
「酈商列伝」:『史記』卷九五樊鄴滕灌列伝酈商。
「靳歙列伝」:『史記』卷九八傅靳蒯成列伝靳歙。
「高祖本紀」:『史記』卷八高祖本紀。
「張蒼列伝」:『史記』卷九六張丞相列伝。
「張陳王周伝」:『漢書』卷四十張陳王周伝第十。
「韓信伝」:『漢書』卷三十四韓彭英盧呉伝第四韓信。

注

- 1) 拙稿「前漢王朝建立時における劉邦集團の戦闘経過について(上)―劉邦集團内部の政治的派閥の形成を中心に『阪南論集(人文・自然科学編)』第47巻第2号。2012年3月。
- 2) 佐竹靖彦『項羽』第九章など、東京:中央公論新社、2010年7月。
- 3) 佐竹靖彦『項羽』東京:中央公論新社、2010年7月。
- 4) 台湾三軍大学編著『中国歴代戦争史』第3冊楚漢戦争～東漢、附図3-84。北京:中信出版社、2012年10月。
- 5) 辛徳勇「論劉邦進出漢中の地理意義及其行軍路線」『伝統文化与現代化』1997年第4期。
- 6) 藤田勝久『項羽と劉邦の時代―秦漢帝国興亡史―』東京:講談社、2006年、150頁。
- 7) この時の項羽の進撃コースについて諸説があり、

その詳細について佐竹靖彦は前掲『項羽』P225・P226・P228に纏められている。

- 8) 李開元『漢帝国の成立と劉邦集團一軍功受益階層の研究―』第一章第一節参照。

参考資料

佐竹靖彦『項羽』東京:中央公論新社、2010年7月。
佐竹靖彦『劉邦』東京:中央公論新社、2005年5月。
藤田勝久『項羽と劉邦の時代―秦漢帝国興亡史―』東京:講談社、2006年9月。
堀敏一『漢の劉邦―ものがたり 漢帝国史―』東京:研文出版、2004年4月。
李開元『漢帝国の成立と劉邦集團一軍功受益階層の研究―』東京:2000年3月。
辛徳勇『歴史的空間与空間的歴史―中国歴史地理与歴史地理学史研究』北京:北京師範大学出版社、2006年11月。

追記

本稿完成後、松島隆真氏の『漢帝国の成立』(京都大学学術出版会、2018年3月)と柴田昇氏の『漢帝国成立前史 秦末反乱と楚漢戦争』(白帝社、2018年3月)が出版された。

(2018年11月23日掲載決定)